

富士山測候所の歴史を訪ねて —野中到・千代子のお孫様宅を訪問

明治 28 年、富士山測候所の魁となる山頂での冬季観測を創めた、野中到・千代子ご夫妻の名前は、同測候所に関心を持つ方ならご存知のことと思います。昨年、不思議なご縁で、ご夫妻のお孫様である野中勝様と陸山幸子様にお会いすることができ、貴重な証言と資料に接する機会をいただきました。訪問した佐藤監事、土器屋理事の手記をお届けします。

野中到ご夫妻の遺品

野中到さんは「高い空の気象が分からないで天気予報が出せるわけではない。富士山は 3776m ある。そこで一年中気象観測を続ければ、天気予報は必ず当たるようになる。」と高層気象観測の可能性を実証しようと、越年をめざして富士山頂剣ヶ峰で冬期の滞頂観測を試みました。

その時の活動に関する模様や記録等は新田次郎の小説「芙蓉の人」や野中至・千代子著「富士山案内 芙蓉日記」、気象集誌等からそれなりに知ることが出来ました。また、富士山測候所勤務の多くの先輩方からもお話を伺っておりました。

しかし、私が知りたかったのは、野中到さんが山頂で気象観測した時に使用された装備や観測機器、観測記録等遺品の存在でした。

この度、NPO 法人「富士山測候所を活用する会」土器屋、増田に同行して、野中到さんの御遺族（お孫さんの勝さん）宅を訪問させていただき、到さんが富士山頂で観測に挑戦した時の遺品を直接拝見することができ、感激いたしました。

その遺品は、富士山で気象観測や登山に使用した鳶口、温度計、望遠鏡及び必要物資調達に関する記録帳等と、千代子さんが登山に使用した手袋、更に驚いたのは野中到さんが建てた富士山頂観測所庁舎残部の一部が御遺族の手元に保存されていたことです。これらは、富士山の遺産であると同時に国の遺産でもあり、どこかの資料館に貴重な資料として展示し永久保存できないかと思いました。

これまで、テレビ、書籍等や各種資料から野中千代子さんの名はその通り千代子さんと思っておりました。また、「野中いたる」さんの名は「至」または「到」どちらかなと思っておりました。今回の御訪問で野中勝さんからご指摘を受け、戸籍上は「野中チヨ」、「野中到」がそれぞれ正規の名前、字であることがわかりました。このことは大変大きな重要なことで、今後表現には気をつけなければと思いました。（ここでは勝さんのご意見も伺い「到」、「千代子」を使います。）

今後、私が探し求めたいのは野中到さんが富士山頂で気象観測を行った際の手書きの観測記録帳（野帳）の存在で、当時の気象関係者たちも訪ねたいと考えています。（監事 佐藤政博）

野中氏のお宅訪問

研究助成などでお世話になっている新技術振興渡辺記念会の高木喜一郎さまの個人的なお知り合いと云うご縁で、2017 年 11 月 26 日（日）午後、逗子の野中勝さまのお宅を訪問しました。本会からは佐藤監事（元測候所長）、増田と土器屋です。

逗子のお宅では、野中勝さまご夫妻と従姉の陸山幸子さま（野中到・千代子夫妻の三女・恭子さまのお嬢さまで、父上の菅原芳生氏は初代富士山測候所長）が待っていてくださいました。お話の中心は「測候所時代の実際の観測や冬の登山の実態を知りたい」との勝さまをうけて、佐藤監事が昔の話をして、「寒中滞岳」の遺品などを見せていただきました。詳しくは佐藤監事の記事にあります。ここで

追加として、「土器屋・佐々木編著：よみがえる富士山測候所 2005～2011」のコラムに関して、下記の様に訂正をお願いします。

p. 3 - 5、コラム 1「野中到、藤村郁雄、新田次郎（藤原寛人）の接点」の中で、廣瀬洋一氏から頂いた昭和 8 年の写真の説明に、菅原夫妻（関係不明）と書いたのは、菅原芳生（初代富士山測候所長）・恭子（野中到・千代子夫妻の三女）夫妻に変更をお願いします。私たち NPO の仲間にとって、大切な富士山測候所の歴史的関係者であることが分かりました。

また、気象庁の職員でもあった新田次郎の小説は史実には忠実だと思っておりましたが、「山頂の観測中に亡くなったことになっている長女・園子さんが明治 34 年 7 歳で亡くなった」ことも教えていただきました。この部分はやはり「小説」であったようです。

色々調査不足で書いてしまったことは恥ずかしくお詫びしますが、新しい出会いから歴史の事実をおしえて頂けることを楽しみに、今年もお目に掛かるチャンスがあればと思います。（理事 土器屋由紀子）



A 千代子さんの手袋 B 単眼鏡 C 資料を調べる佐藤監事 D 温度計



E 鳶口と千代子さんの手帳 F 晩年の到さん G 明治 28 年剣ヶ峰に建設した観測所の木片 H「富士山巔観象台」建設のための募金パンフレット（部分。全 20 ページ。明治 33 年刊。）